

寛永諸家譜

支流 藤原氏癸廿五冊之内三

116

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (116)
函號	76 1





丹羽

兼松

松浪

松倉

石堂

松崎

松風

松村

寛永諸家系圖傳

藤原氏

矣二

文流

丹羽

長政

修理亮 尾列 兎玉村の人なり

先祖を武列 兎玉堂 中年より

尾列より 平姓なり 故

淺草文庫

藤原氏よりなり投世武衛よつとく
切なり 法名 禪子

長忠

将監 児玉の人なり

少年より武衛よつとく 子世

長秀

人部 赤松の尉

少若子代

児玉の人なり

天文十九年長秀十六歳ありて
織田信長とを約し領比をてく
加信あり信長姪女とありて長秀
より書ありて
永禄六年信長江列依く本と征
伐のてん軍謀とありてりて
同十一年諸將ことりて江列其作
の戦とせあやうふ
日十二年信將の由司が居城大河内と

てあ〜と道と板

元龜^{げんき}三年^{さんねん}の淺井^{あさい}俊成^{しゅんせい}守長^{しゅんちやう}信長^{のぶなが}

と〜と〜と〜と〜と〜と長秀^{ながひで}

淺井^{あさい}の家^{いへ}に破^{やぶ}れ丹波^{たんぱ}守^{もり}と依^よ和^わ守^{もり}

と〜と〜と〜と〜と〜と

日^ひ二^に子^こ淺井^{あさい}と和^わ倉^{くら}義^ぎ宗^{むね}と〜と〜と

と〜と〜とあそと敵^{てき}と〜と〜と

信^{のぶ}長^{なが}と〜と〜と〜と〜と信^{のぶ}長^{なが}野^{のの}田^た

福^{ふく}壽^{じゆ}と〜と〜と〜と〜とに^に列^{りやく}大^{だい}津^{しん}

浅^{あさ}さ坂^{さか}中^{なか}とせむ枝^{えだ}旬^{じゆん}のあひご^{あひご}公^{こう}茂^も

府^ふと〜と〜と〜と〜と勝負^{せうぶ}い〜と

尖^とせは長^{なが}秀^{ひで}宗^{むね}といわく大^{だい}津^{しん}と

〜と〜と〜とに^に列^{りやく}の國^{くに}賊^{ぞく}路^ろと〜と

ぎら〜と〜と〜と〜と長^{なが}秀^{ひで}賊^{ぞく}流^{りゆう}と

余^よ人^{ひと}と討^{うち}捕^{とら}ぬ又^{また}和^わ倉^{くら}が指^{さし}針^{はり}堅^{かた}固^こなり

城^{しろ}と攻^{せき}めり和^わ倉^{くら}流^{りゆう}踏^{ふみ}つと〜と和^わ

と〜と〜と〜と越^こえよかつりぬ淺^{あさ}井^いと〜と

小^こ谷^{たに}よかつりぬ

同日三多破丹波守清宗とありしにひて
依和山五万石の地と長秀よりしりし
信長が命と仰ししよりしと長秀軍
切ありのりししと信長が所持の本格と
し意と清宗よりしは後井も又意滅ぬ
天正三年長秀の一揆と討
又將軍義昭信長と不和ありし
義昭が外中流とありしをまふし
長秀が討つとありしを攻め

同日二多り長秀没ありし
同日三年長原が陣より一方向
ありし
同日信長惟任氏よりしありし
姓とありしとありしとありし
日五多荒木村守信長よりし
長秀が討つとありしとありし
日十年藏田信澄とありしとありし
乃城代とありし

日年六月二日明智光秀信長氏
弒と長秀義兵と殺し明智を
誅さんとて毒入りしるるとい
ども信長とぞりかたびるふ
こ同くしるごと城より入るに七
信孝と謀るいしく信澄ハ明智
かじこたつ急りこれとる
て城と入りふ一とく印
り信澄の居とら干焚樽とす

屋より信澄自害とこりし
河とるり栲列とじき伊丹の
賊徒とつけ居濟りし
秀吉よりゆえに

日月十三年山崎合戦よはの明智と
謀るとるり長秀と秀吉と
まじらるとしすぶとるひく
交盟いしくかき秀吉と同清次よ
しりしき信忠の嫡子り福丸と

柴田池田もあつてくつりお議
いふ孫君幼雅のあひごの家
口人うらんとむらうらうら
とあつて政務ときくゆへん
關白と割て四方勲功の輩
う海もふるゆへとて柴田播磨
秀吉として記録とけくらし
これとてと長秀り若狭一玉は列
志がたつ鴻の二郡と海り大津

居るに水の兵とくくつりし
秀吉と柴田と雄とけつりし
く自玉とやうらうら秀吉は
り一教白一教ヶ取の要客を
うへ合弟美濃守秀吉とと大將
として政おのあつてとて長秀
又海津口とあつてと長秀と大將
として海津りあひまうら
日十一年二月柴田二万余騎を

率一々中河内よと依久る
玄蕃元一々中川源兵衛が
要客とせめ屋敷一々中川一に
とひて死とともきよ長秀兵衛を
飛一余吾浦一にほこそて之平
余騎湖あしの行よ陣とら秀吉
大垣一ありてこれときついろさ
馳て夜一入本町の城一にほく
長秀と相約一ゆり我と決とる一

こなり玄蕃元ととき一廣場一
いで一とら一と夜も一
兵衛一にて中河内一ととこら
とら一長秀がと陣一暗夜一におあふ
て前と夜後と衝一と秀吉拂曉
一に中河内とおと陣一玄蕃元が兵
と槍とゆとゆ玄蕃元兄弟原
不破等とあふ一とつひととら
とら一曉一と午の河一とらと秀

聖と仰ふに利とくく言著元が
惣軍敗走と柴田と又さうゆが事
あつらんといふとくあつたがさうおた
の味をまらる秀吉長秀大軍
といふつむくしれとせめりこじ
翌日勝家自害一越列即討
平均と長秀勝家の子槍とたび
り依久る言著元と虜これ
をさくまのり秀吉より長秀

越前若狭加賀半玉とゆり越前
り何と

同十三日四月十六日五十一歳に
卒と 法名宗徳

秀重

九兵衛尉

長宗より属と

元和元年大坂陣の時平将軍よ
とひと討死

女子

松原伊賀守が妻

女子

大津傳十郎が妻

長重

少名鎚 少郎左衛門尉 加賀守

元龜二年 遠州 波阜 山崎

列 依和山 山崎 十二 築乃

江列坂 依和山 長重 秀右の命と云
て 信長の息女と娶

天正十一年 築田と合戦 長秀と

何れ 長重 高田 遠州 尉と号と 越前

府中 の 城 長重

日十三 長秀 卒 家督とつぐ

日十四 長秀 従一 何れ

日十五 長秀 依一 内務物と 征伐のこ

さ長重が先陣の士卒軍法を
犯す者大なり、かゝりて越前加賀
とのぞく

日十五年秀吉統率を殺すの時
長重より相模の士卒又軍法を
そしむ秀吉いよくいりてあはれ
と除加列松任とあはれ
文禄四年加列小松十二万石の領地
とへふなり二十五年参議り

任一任之位に叙し兼加賀守
長重之よりお肥前守利勝

東照大権現の命よりそし長重と
利勝を隣地よりとへて、あは
しむ和あり長重 嚴命とけ
うへりりくゆとり、玉乃境を
塞すにぞひ

大権現長重の涉腰をくづり終る
日五年同原合戦の時前田利勝

長と教して小松のを色とくしむ
長宗後井繩子よとひくくす
町り二千歳なり
日六年江戸よ下向一芝の色小
島居と

日八年

名徳院殿先手の四約と思石一旦の款
射と取ゆるされあつて常列
右後りよひく領地一百石と給り

日十九日大坂陣より修書と

元和六年一萬石の領地と加へ
日八年右後と何れも奥列棚倉
りよひく五万石の地と
寛永四年棚倉とあつて白川小
をひく十萬石の地とすまら

日十四日同二月六日江戸よとひて
六十七歳少く卒と 法名淨英

長正

後中守 早世

秀吉

秀吉

藤吉之丞内少将

くどめりる大和入納言秀長其子と

なれのらゆありて秀吉の命よ

ちるひ坂守和泉守が其子とあり

ていり塔列小居と

直政

蜂屋茂後守 早世

蜂屋本羽守が其子とあり

長俊

長門守

名徳院殿よつとくまら

長次

近

長八

名徳院殿よりつとくまら
日十九日元和元年大坂御殿
の御体より信をよ
元和二年御体千石と御
日又年御上洛の信をよ
伏見よりよひく御と元和二年

女子

赤田隼人正が書

女子

粟屋越中守が書

女子

稻葉彦六郎が書
民部少輔の母

女子

青山修理亮が書

女子

右田大膳大史が書

長名

三右衛門尉

元和六年長名六歳少しくと次がま

跡とつぎ千石とふ海ら

寛永十四年より西書院書とほむ

長和

六右衛門尉

家紋 遠梅菱捲摺

光重

在京亮 武苑の戸よまら

寛永十一年

將軍家沙諱のまると海らり位下

子叙一在京亮よ何ぞ

同十四年父が家督とほわくく白川

居何ぞ

同十九年十二月廿九日從四位下叙
左京大夫任伊弉

女子

酒井下總守書

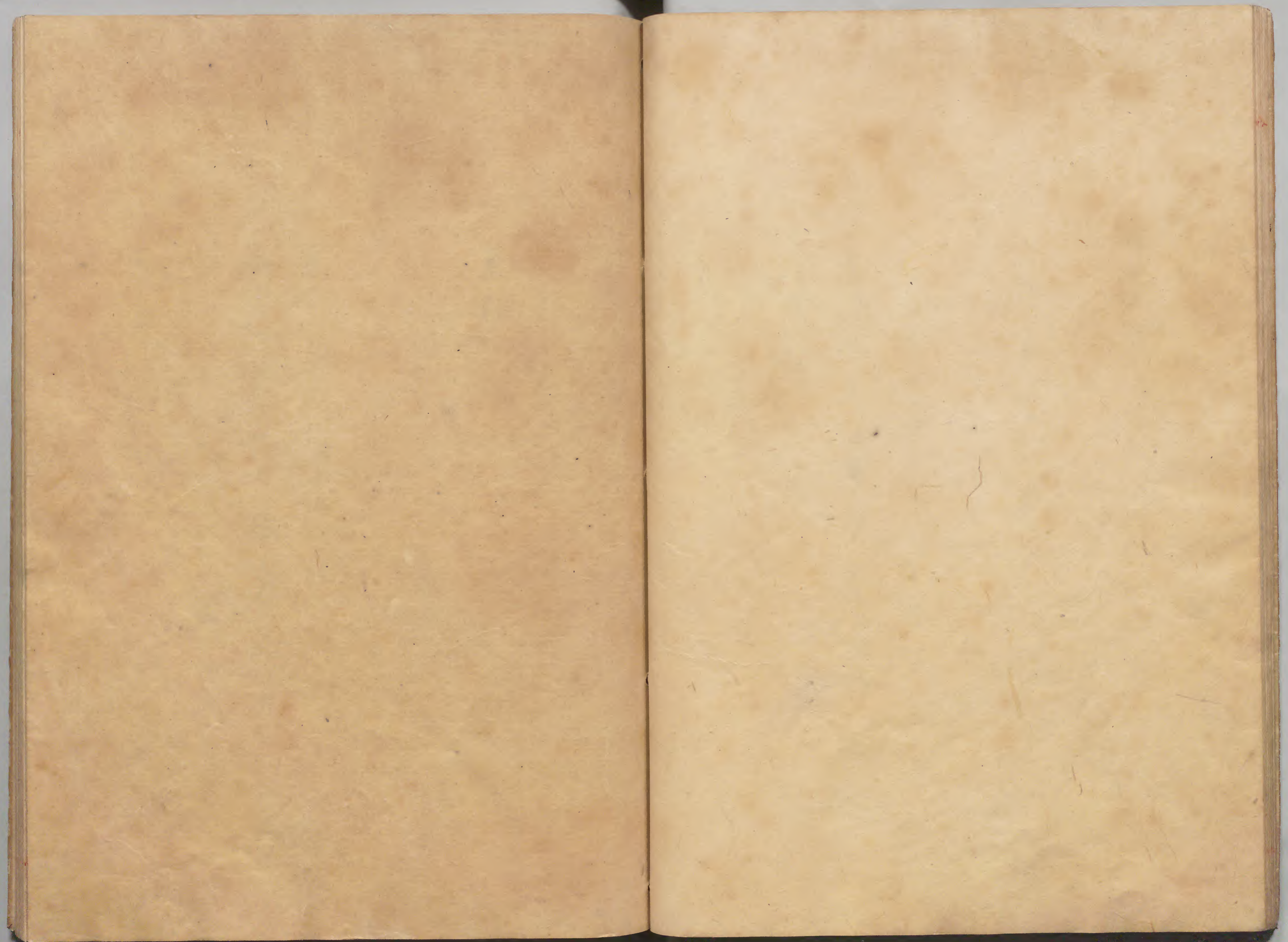
女子

大為書 早世書

女子

後書 内通書 次書

家書 級書 中書 之書 葉書 世書
之書 代書 遠書 持書



兼も
松まつ

秀清ひできよ

志兵衛尉

生國尾張

藏くら田の信長の伯父と藏くら田の右衛門の尉の

属しゆ——くまどく軍切あり

長二子一死と 法名秀清ひできよ

正吉

又甲郎 後修理亮と号す

生國曰前

くづめを藏回信長よりつゝて三百

貫と銘す

永禄十一の信長に別其作の城を

せしむるとも評内表を即利定をい

正吉先登をり

元龜元年の影光佐大坂築城の

中より評内表を即利定をい

士殺十人おこり信長にせしむ

りしとせしむる

らき正吉又徳士より抽先登

く敵陣より入れ入力戦く甲士一

人とうらとら

天正元年越前とをいのうひ力振

山一戦の別正吉先平よりす

款糸と何いそくかひ疵とやうと
いへともほおりそめ首とやう
信長より款ど信長共切と感
正名よりほげくいんく正名が
勇いまよりくぐりどといへご
と今日を結り法士よりとく
そりあそそれらる短鞋と
正名よりつまよりいんくこれ
永着多しわち刀此鞘よかけ軍

中より取柄の短鞋なり今は
うけあそく軍切と貴どとなら
あまをたよりふりこのく正名鞋と
著るふかゆかつさく正名款ど
このくの款首と前波氏よりと
あそくその姓名とふ前波が
これ物倉家来の軍物中村を
が首なら中村首とうけら
る物倉減亡とくよいん人の

尾列比良郷よとひく依、平太夫
父れ備言と報づるのときこひり
属らるりのむかへ正者と又依成
と四好ありかきかへり依、之
こもよ取むうしに枝地とうい
これと惣とき共備言およありと
その難とのれをりいれよらて
備言れ物ときこひく門外乃橋
と破換してあつときぬえれを

わととりあきく追来らんめ、通海
を絶んをあなりあらんはよ提士一人
とこれるるこひ成をよけんごら
旅人の中より正者一人あらん
橋とこりて枝地へしつり、れ
とよすけくかアらるり
日十年信長を能ちりてい
自殺の言正者江列安士り
ア〜りの難りあらむら

織田信雄一ツ入と八百石の地と
領

日十二手長久の合戦のとき正
正成父をよして小牧に居せし
ころ一尾列一宮城のつあり
屋にうりつきの一街談巻説
り正名この名をりつくと西尾隠波守
り名をくまると一とくちり
東照大権現をりつらお母とけり

く一をとくひをまふかきゆ
款とくをちりせぬこのゆを
りつと誠とかりふ
そのらお信秀をりつと秀吉
群士の初業りつとちりつとあを
えとびと英現をけしひらの時
正名とてく軍中とけりおの
そのえとびりつとあを
現れ負りつと領地千石と

うへふ秀吉薨^{こころ}一^しく後加^{のち}が久^{ひさ}の
肥前守利貞と

大権現不和の事ありて秀吉は家士
くしめく

大権現の魔ト^ま一^しく属^まするもの七人
正吉とりの一なり

を去る年京橋沙汰^{さた}治^ちう^う
大権現奥列法が馬のやうな名^ななり

一^しく去る年京橋沙汰治う

日多岡原陣のさき正吉徳列
の案内者ともなるかきし

大権現の釣合と^かけ^けは^はり^り法^はが^がる
い^いあ^あよ^よい^い戸^とを^をお^お徳^{とく}列^{れつ}波^な阜^ふの^の城^{じやう}と^とも

ふのとき款城^{けんじやう}し甲^か卒^{そつ}と^とか^か
河と^かる^るて^てと^と拒^こる^ると^とも

一柳監物と^とを^をむ^むら^らに^に河^か回^{わい}と^と後^ごふ
款^{けん}敗^{ぱい}し^して^て去^さり^りて^ての^の名^な津^つ回^{わい}

飯^いら^ら即^{じやく}と^とい^いふ^ふの^の殿^{との}と^と正^{せい}吉^{きち}は^は一^しく

をひくこれと追津田と祠とついで
しじりの形勢せりこれと英
談とそとの首級とついで
園原開陣の故

大権現の台命とつけし海り下地
忠告とついでこれ忠告とついで
申請事ついでなりこのついで
二千六百石と領と忠告とついで
このついで 台命とつけし海り

尾張大納言義直卿よりしる
奉長十九日えわえ日大坂あ夜の
中陣より義直の旗下よりあり
寛永四年九月八日八十六歳にして
死に 法名英云 道号一箇

正勝

坂右衛門尉 生國同前
行歩不自由なり仕官をやめ

て執居と

寛永二年八月廿七日六十四歳にして

歿す 法名道祐

正成

又八郎 後源公清尉と号して生玉

曰前

十八歳にして信長より了ふ

天正十年信長自殺の時尾列

清頃よりありしその難よありと

そのち藏田三七信孝より了ふ

二百貫の比成領と後信雄より

了ふ四百石と領と

日十二年長久平合戦の時八月

晦日尾列岩倉路よりをひく

大権現信雄より命ありしをひく

まじく尾列遠村を正成正成を居

るといふなりと志しれむとてけり

を備りしとてしるすこの旨

寛永二十三年 食禄二百石を賜ふ

同六年

名徳院殿より修入す

同年其田陣のとき修入す

修入すそのち 釣合とすけ

と修入り大書の進取とすけ

同七年領地二百石とくく入修入

同十九年大坂陣のとき修入す

使者とならる名徳と別信を以

聖多沙陣のとき天王と名

をひく首級とすけ

元和二年 釣合よりあて義直

より一斗一匁正名が承地二千石と飲

と修入六石を正成が才又長末正廣

よす

寛永十七年九月廿二日七十八歳

一と死す 法名長切 道号忠屋

正行

之右郎 生玉回あ

藏田佐雄 一ノ尾列重右村

一ノ尾列 十八歳少て討死

正廣

又兵衛尉 生回同前

義直御 一ノ尾列 足将と討死

女子

依分利七郎右衛門尉清直が妻
清直が依分利小右次清直が次男あり

女子

徳永全兵衛尉秀親が妻

秀親が徳永全郎兵衛尉捕秀が長子

なりし清直因幡守より父捕秀を

藏田佐雄より一ノ尾列伊庭と領と

女子

兼松源又兵衛尉正直が妻

女子

津田新十郎政盛が妻

政盛を尾列岩倉の城に職田伊豫守

信安が末子なり

正尾

又富師 茂列 伊豆よき

母を采原傳右衛門尉の女

元和元年

名徳院殿とあり

日二年父正成義をとりし

尾成尾列よりうけしなり

正尾を

名徳院殿より

父正成が家比七百石を領し

日八年 作とありしり書院

書とありし

寛永九年

將軍家より

女子

同十年領地二百石とくは後ふ
同十二年五月八日 釣合とけ
ふりり歩行の路となら
翌年十二月晦日 伯りりて
布衣と着と

正業

源兵衛尉 生國尾法

正方

義直郷よりつるく父正成の位
二千石とふ

与一郎 生國同お

津田新十郎とやらあいて
子とらるるかゆり平姓と
なり

正長

又八郎 生國同お

女子

石見初代清時正の書

時正石見作兵衛尉時清の長子

なり父ともり義直つり

了

来

右郎右 生國同家

女子

山本権之依色總が書

女子

正春

孫三郎 茂範江戸よき

母名物倉石見の正春の女

寛永十七年二月十三日

お軍家とねーくまら

正直

赤坂御所 中尾治

長十之

名徳院殿とねしつとひふ

日十又の 作しつて大書と

つとむ

日十九日大坂陣のとき

之水正が継り列して江戸法成

書とけしむ聖多再陣のとき

名なるりたるぐひつとくあり

又月七日天馬の巻よとひくも本

之水正継中の兵士競進く短兵

急り接とるがゆり正直

しつ下池よりひく黒具足と若

きり款と実州の首とらん

と腰剣とめつと水ときつるにり

款にひく徳ありく底口乍取と

かうありしし首とてうりありしを
まゝり討死ししをまゝるるにや
し味方ありしありありあり
てこれとてくふこの世なり歎
ありありありありとて本主水正
が長子若次郎とてことごとくか
てその能くせんと大坂敗亡の後軍
初とてけりすの勝者をえりて
給ひ賞とてくふ百石の采地と

を
を

え和ふとて五月八日 釣合とてけり
しり大坂の陣とてあり

日九月四月廿七日

お軍家とてありしとてあり

寛永五年十二月六日 釣合とてありて
此歩陣の陣となり

日年十二月晦日 作ししとてありて
とてあり

日十月十四日十六日 右命とくうう
沙目付となしり五の字の差物と
うれ

日十二日十二月十四日 右地十石を
くつへはりり 都合千六百石を領
知

日十四日 右地とくううの地
の五石の地とくうう 右地とくうう
と使とくうう 日十

二月廿六日子の別 右戸とくうう
正月廿七子の別 右地とくうう 右地とくうう
中の別 右の地とくうう 日十月十九日 右地とくうう
刻の戸とくうう 右地とくうう 右地とくうう
と使とくうう 右地とくうう

右 右地とくうう 右地とくうう 右地とくうう
右地とくうう 右地とくうう 右地とくうう
右地とくうう 右地とくうう 右地とくうう
右地とくうう 右地とくうう 右地とくうう

ひかりしとくごうとくまじと器はらし

幕まゝ故こ

凡まづ内うち二に柏かしわ葉は

松波

● 重總しげむね

重隆しげたか

右清門尉 生國山城なまくにやま

文祿元年十二月十日よ從父位か下げり

叙し一但守しりし何なにぞ

東照大権現よりつゝつゝつゝつゝ

長十一年八月十日八十二歳

卒

重正

元年 生國冬河

大権現よりつゝつゝつゝつゝ

元龜二年を列之方原の沙陣

信をよこされしつゝつゝつゝつゝ

を海より武田信玄よりつゝつゝ信玄

國行の口とつゝ

天正三年長瀬戰場よりつゝ

首級をとつゝ

長久平小田原ホの每陣おと

語約

文禄元年高野原のときハ病

かり信をよこつゝつゝ

日多八月十日年八歳よりつゝ死

重次

梶平 六苑 生國回前

物鮮陣のとき名護屋よとひて

大指現り形瑞ししきまけり

兄重正が志詔とし海ふそのら

台徳院殿りしきまけり

真田陣大坂陣は信重とつとむは

將軍家りしきまけり

寛永十七年三月あつ七十八歳

去る死す

重種

少将兵衛尉 生國武苑

將軍家りしきまけり

重信

源兵衛尉 生國回前

寛永十六年七月十八日

將軍家ノ御瑞ノ

重宗

九兵衛尉 生國曰

將軍家ノ

家紋

松浪

● 勝直

平右衛門尉 生國尾治

藏田信長曰信雄

天正十八年小田原陣の故

東照大権現

長十二歳九月六十七歳

死に 法名浄心

勝安

平右衛門尉 生國曰あ

勝安十六歳のときさくらんぼ

大権現より 三つさくらんぼのら

名徳院殿

將軍家より 三つさくらんぼ

勝安

平右衛門尉 生國曰あ

大権現

名徳院殿

將軍家より 三つさくらんぼ

寛永七年七月軍二歳にりて死に

法名浄心

政俊

平右衛門尉

長十郎より 三つさくらんぼ

名徳院殿より福一とくまのり後
將軍家より一とくまのり後

政治

市平 生國武苑

寛永十二年八月二十一日

將軍家より福一とくまのり

日十八年二月十日より大沙番を

しる

勝重

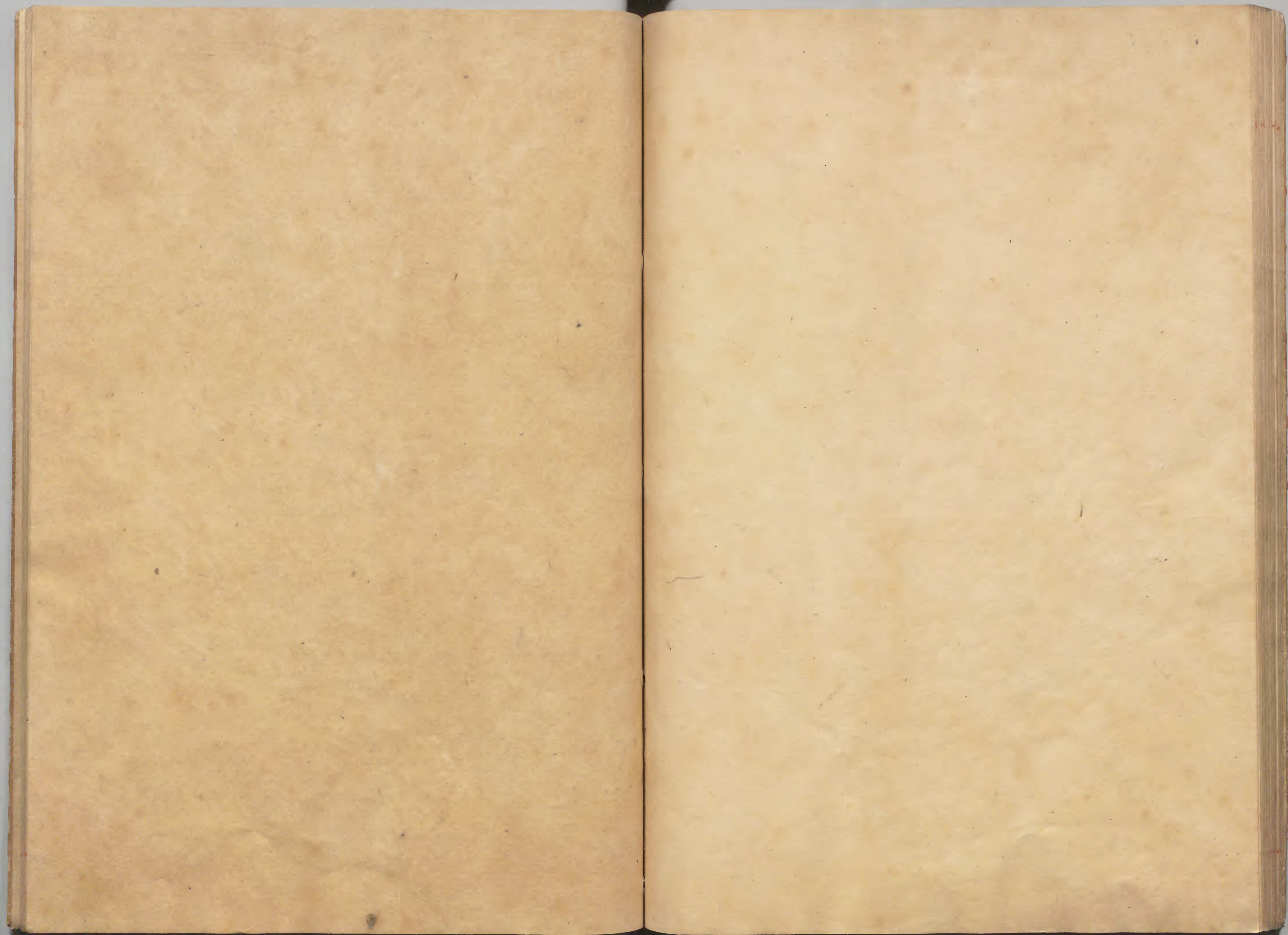
平右衛門尉 生國後河

寛永四年十一月十日より

將軍家より一とくまのり

日七年 嚴命ありて勝重がきつ

家紋 丸内簾



● 某

松倉

右馬助

本國大和

筒井 次慶

重信

右近

生國門前

順慶より信濃へ食邑貳千五百石と
領し和列結崎の城より信濃へ後
食禄と加倍し同右知城より
あり又貳千石をくると高取の城
在信濃そのうち約合八千二百石と
領知し伊賀名張の城とあり
けりさき長秀吉朱下とあり
重信よりて角井伊賀守より
あり

文禄二年七月七日二十六歳より
あり 信名安次

重次

十右衛門尉 生國曰あ 信名西彦
尾列より信濃へ下野守忠吉より
ありそのうちあり

東照大権現

名徳院殿より信濃へあり



● 某

石 卷

下 野

生 國 相 換

小 條 氏 政 了

康 敬

下 野

生 國 同 矣

小原氏とて
と正十八日小田原いすし落居せし
ふとき氏とて使依とて京
都りのが里を長秀をり海に
秀を治し康教とてめ海に
りしりて小田原落城の時京
都より下玉とてまし伊豆三枚橋
しりしりめし行しとてとてこの
とき秀と

東照大権現より治げくこれをいげ
らふ

大権現開東海入玉のとき康教を多
依後守とてりしりかされ治へ
しりしり

享長十年十月八十歳より
死し 法名幻庵

敬重

たふ元 生國相換

大権現

台徳院殿 二十歳少く死を 法名少

康貞

権右衛門尉 生玉まふ小お

台徳院殿

將軍家より

康元

八郎右衛門尉 生玉氏

寛永十二年

將軍家より

康正

権右衛門尉 生國相換

台座院殿

將軍家

家紋

二鶴

● 集

松まつ濟とぎ

集

之右末の射 生國なかつくに之の河が

東照大権現とうしょうだいこんげんよつふよつふくくちちののふふ

某

檀七郎 生國日記

大檀現一ツ一ツ一ツ一ツ

台次

檀七郎尉 生國日記

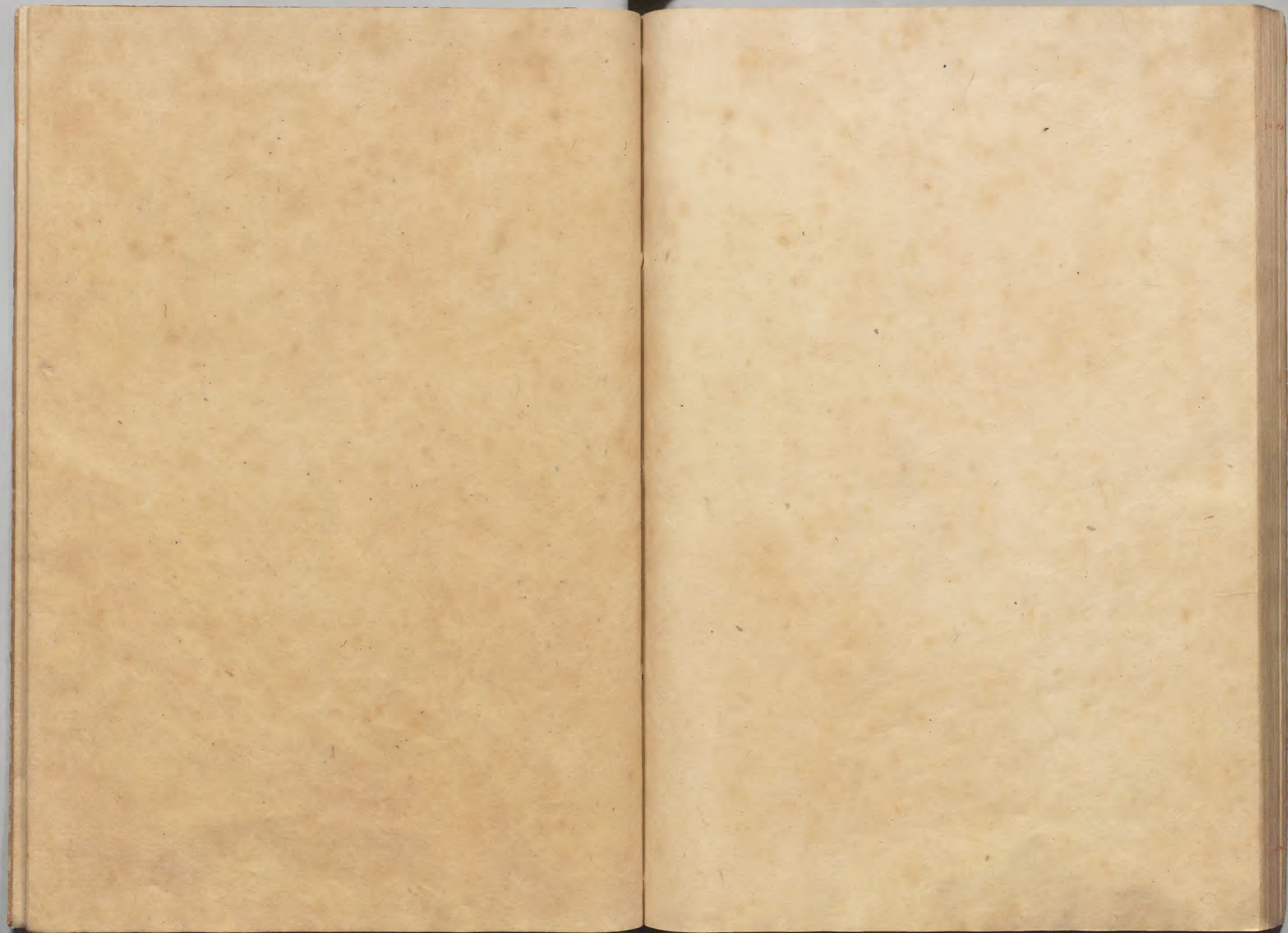
初七後河大納言忠長とみなが一ツ

寛永十二年

將軍家より一ツ一ツ一ツ一ツ日十五年

より沙小姓せうじの書と云ふ

家紋 之こゝろ段いづみ右みぎ巴うま



松風

● 正考

六角兵衛尉 生國後河 法名道全

今川義元 了了のち

東照大権現 了了

名徳院殿 了了

正廣ひろ

助兵衛尉 生國くに 江え 法名ほりな 良勝りょうしょう

大権現

台徳院殿

將軍家しんげんけ 一いち 二に 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう

正忠ちゅう

權右衛門尉 生玉たま 同どう 前まへ

大権現

台徳院殿

將軍家しんげんけ 一いち 二に 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう

正成せい

十右衛門尉 生國くに 武ぶ 秀しゅう

將軍家しんげんけ 一いち 二に 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう

正勝しょう

傳三郎 生玉たま 後ご 河が

將軍家よりつくるまゝ

家紋

三龜甲

● 義村

松村

妻 生玉 義村

氏 別 江戸 山崎 守

所 あり あり あり あり あり

か

と 正 之 氏 浪 人 とな り 相 する なる 夫

りしにりりて小地と成と
文祿二年八月十一日某にりり
法名某某

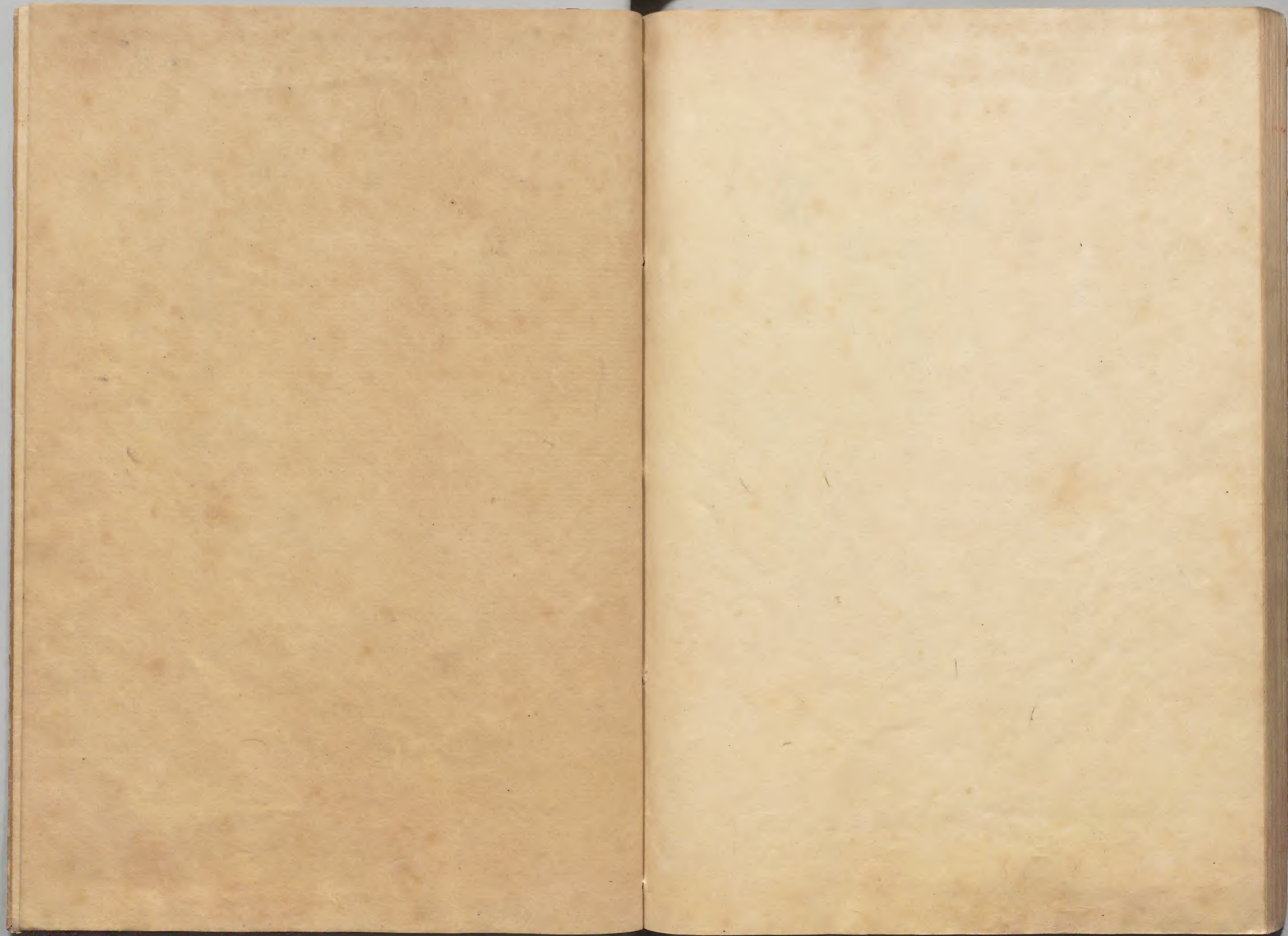
種しゆ總そう

松村を大納言尉 生國同前
浪人といふるもさき毒と改かへて松村と
号と改かへ紀伊大納言尉 宜よろ御ごより
了

政せい總そう

源右衛門尉 生國同前
寛永三年
名徳院殿
將軍家より了す

家紋 丸の内うら一柏いちがく



● 集

松村

時安

右長門尉

生國大和

号長十八

东照大権現

涉代友職とつとむ
日十九日一死と

時
並

台右傳つ尉 生國同前

兄時安死くは 伯とがうり

西代友職とつとむ

家紋 竹の丸よ飛雀

